中国のメディアの歴史をテーマとした東洋文庫での学外研修の教育的効果について

中村　威也・小川　快之・相原　佳之

1. はじめに

近年のSNSを中心としたメディア社会は、現代を生きる私たちにとって、非常に大きな意味を有し、時には一個人の人生をも狂わせかねないものとなっている。情報社会・メディア社会のなかで情報の確かさ・不確かさを見極める力や、SNSの発信者として正しい情報の発信や場にふさわしい表現方法や、プレゼンのような発信者の意図をコンパクトに相手に伝達する力が、社会人となっていく大学生に求められている。

こうした情報リテラシーを身につけることは、大学生にとって今や必要不可欠であると思われ、大学において情報学関連の単独の授業・講義が設置されているのは見かけるものの、複数の授業や講義でそうした力を訓練する場が設けられているわけではない。

ところで、歴史学を専攻する大学生は、史料講読や講義のなかで史料の吟味や分析方法を学び、課題レポートにおいては、史料の吟味・読解を踏まえた上で、情報の整理を行い、自分の考えを分かりやすく読み手に伝えるという学習活動をしている。

その最たるものが、卒業論文であり、時に膨大な書籍・論文のなかから、必要な参考文献を選び出し、それが依拠すべき信用に足るものかを判断し、複数の参考文献の主張・情報を整理することが必ず求められる。そして、それらを読み手が正しく理解するために、図表や箇条書きや引用などの方法を身に付けるとともに、平易な文章で表現する力を養うことも必要となってくる。

このように考えると、大学における歴史学関係の学部学科は、現代社会に必須な力を鍛錬する格好の場とも言うことができるであろう。

筆者らは前稿において歴史学教育で注力すべき点として（A）（B）の２点を挙げたが[(1)]、上述の検討を踏まえて、もう１点、以下の（C）を加えておきたい。

（A）情報社会における情報に対する対応力・分析力

（B）グローバル化が進む社会における多様性に対する許容・理解

（C）情報の発信や意図の伝達における、それに相応しい表現方法･発信方法

本稿では、歴史上さまざまに存在したこの（C）を実感し、意識してもらうことを主眼として、国士舘大学文学部史学地理学科の東洋史学コースで、2019年

6 月 13 日（木）に行った学外研修「東洋文庫と中国風の史跡をめぐる旅――東洋文庫・旧芝離宮恩賜庭園」の内容を紹介してみたい。

今回の学外研修には、2 年生 3 名、3 年生 17 名、4 年生 11 名の計 31 名が参加した。研修全体の引率は、東洋史学コース特任教授で東洋文庫研究員でもある筆者小川が、同コース主任の岡島建教授とともに行った。

ちなみに、東洋文庫の展示と書庫見学については、事前に筆者ら 3 名の共同研究の場である「漢籍教材研究会」で準備を行い、当日は筆者小川とともに同コース非常勤講師の筆者中村が東洋文庫研究員として案内・解説を担当した。書庫には大人数で入れないため、学生を 3 グループに分け、書庫の見学とミュージアムの見学を交替で行った。また、書庫見学の事前準備では、東洋文庫研究員の筆者相原が諸手続きなど下準備を行った。

さらに、新たな試みとして、筆者中村が展示品や閲覧史料に関する解説冊子を作成して使用した。本稿ではその冊子と、独自に作成した問いを通して、(C) についてどれだけ理解できたかなどの教育的効果や課題点について、具体的な事例をもとに検証と考察をおこないたい。

なお、前稿で検討した 2018 年実施の学外研修での教育的効果と比較検討するため、本稿では、東洋文庫ミュージアムと東洋文庫の書庫での史料見学について取り上げることとしたい。

2. 東洋文庫における学外研修の反省と準備

(1) 前回の学外研修の概観と問題点

国士舘大学文学部の東洋史学コースでは、上述したように 2018 年にも東洋文庫ミュージアムならびに書庫での史料見学による学外研修を行っている。その際の教育的効果については、すでに筆者らは前稿において分析･考察をおこなった。

本節では、主にその前稿の内容をもとに、前回の学外研修とその教育的効果について概観し、その問題点や注目すべき点も挙げておきたい。

2018 年の前回の学外研修も、今回と同様に東洋文庫ミュージアムならびに東洋文庫書庫での史料見学を実施した。前回の学外研修の目的は、多様な価値観が存在し、情報にあふれ、グローバル化が進んだ現代社会で正しい認識・理解ができる素養を身につけなければならないという認識のもと、「多様な社会の存在に対する認識を持つこと」「江戸時代の日本に中国文化がどのように受容されたのかについて考えること」を目的とした[(2)]。

前回の学外研修における教育的効果としては、主に以下の 3 点が確認できた[(3)]。

(a) はじめての場所・史料を間近にみたという、純粋な感動・驚きの発生。

(b) 史料の実見から多様性に気づく、見いだすという好奇心の惹起・喜びの発生。

(c) 史料をもっと見たい・書いてある漢文の内容を知りたい、という好奇心の充足意欲・学習意欲の向上。

これらは上から順をおって (c) の学習意欲の向上までに達した学生もいれば、(a) や (b) まででとどまる学生も当然いたが、東洋史に関係する史料に対して、(b) 興味・関心・喜びを見いだし、(c) 学習意欲の向上が認められたという点で教育的効果があったといえた。

また、このような教育的効果を促せた要因に、事前準備として基礎的な知識を授業の時間を使って学習させた点を見逃すことはできない。そのことにより、はじめて実見する史料であっても、一定の興味・関心を持つことができ、スムーズに観察を始めることが可能となったのである。

さらに、学生に身近な社会生活に関する史料やイメージしやすい絵画史料・画像史料は、学生により多くの刺激を与えることができ、教材や見学対象として非常に有用であることが分かった[(4)]。

一方で、問題点・課題点としては、「「考えてみましょう」という自由な発想や考えを促した問いかけに対して、回答率が半数前後にとどまったこと。」「展示品に対するメモ・コメントを求めたが、内容のあるコメントが約半数の学生からしかなく、全体的にコメントが浅く感じられたこと。」などが挙げられた[(5)]。

つまり、見学・観察に際してのヒントやサポートが乏しいと、学生の「気づき」につながらず、教育的効果がそれほど認められなかった嫌いがあった。すなわち、見るべきものの数が多数にわたり、1 点の史料に対して全体的な印象や目につきやすい点しか気づけなかったのである。

こうした課題については、すでに筆者らは「ミュージアムでは数点に絞って深く考察させる」「書庫の史料は、見学時に注意・注目すべき点を示し、設問を工夫する」「見学時間を十分にもうける」ことを提案した[(6)]。

したがって今回の学外研修では、史料を限定し、気づくべき、観察すべき点を提示したり、具体的な問題をもうけ、その解決方法を学生が模索する過程で、自分の「気づき」へとつながるように意図した。ある程度、視点や思考をリードすることにより、学生の「気づき」や「知的好奇心」を促せるのではないかと考えたからである。

(2) 企画展の展示品（企画展図録）の検討

前節でみた前回の学外研修の問題点を解決するためには、見学史料をいかに選ぶか、すべてを見せるのではなくいかに限定するかが重要だと思われた。

そのため、筆者らは学外研修時に東洋文庫ミュージアムで開催される「漢字展—4000 年の旅」の企画展図録をもとに、どのような展示品がどのような解説のもとで展示されるかをまず検討した[(7)]。

図録には「漢字展―4000年の旅」の意図・狙いについて、以下のように書かれている。

本展では、漢字の成り立ち、漢字文化圏の広がり、日本における漢字文化、文字の由来など、日常的に使っていながら意外と知らないことの多い漢字にまつわる様々な知識を、国宝を始めとする文化財を中心とした展示によって分かりやすく紹介いたします。[8]

ここから、漢字を共通のテーマとして、“意外と知らないことの多い漢字にまつわる様々な知識”を展示品によって提示・解説するのが主眼であることが読みとれる。実際の展示でもその意図や狙いは十分に来館者に伝わったと思われるすばらしい企画展であった。

今回の企画展は博物館の企画展でよく見られるような、展示品全体を通して見学者にストーリーだったテーマや新たな解釈による新しい考えを提示したり、理解を求めるスタイルではないという特徴がある。

図録からは、企画展が6つのトピックに分かれており、“漢字”について一定のテーマが設けられていることが分かる[9]。

トピックのひとつ「漢字の成り立ちと発展」の、“漢字関連年表”という展示ボードには、展示品の成書時期と書体とが年表でまとめられ、脇の“書体の変遷”で具体的な字の姿が掲示されていた。

ただし、実際の展示品は展示ブースの右から順に、以下の順で展示されており、書体の順でも書籍の成立順でもない[10]。なお、(　)や【　】は筆者中村が補った。

・急就篇【楷書】紀元前3世紀成立　刊行年不明[11]
・説文解字【小篆・楷書】清版
・蘭亭序（拓本）【行書】
・千字文（拓本）【篆書】6世紀成立[12]
・殿試策【楷書】1772年清代
・干禄字書【楷書】8世紀成立　1884年刊
・永楽大典【楷書】1408年
・洪武正韻【楷書】1374年
・康熙字典【楷書】1716年
・第1次、第2次漢字簡化方案1956年

おおむね史料や書籍の成立順に展示されていると見受けられる。ただしそれでも、後述する殿試策を除いても『永楽大典』と『洪武正韻』の順番は矛盾しており、ひとつの基準だけで展示順が決められているわけではなさそうである[13]。

もちろん展示順は、展示スペースや所蔵品との関係などミュージアム側のさまざまな事情があるのであって、そこに厳密さを求めるのは現実的ではなかろう。展示品ひとつひとつを単位・切り口としてトピックに関連する知識を提示すると

いうスタイルだと考えるべきである。

なお、展示品の全体的な特徴としては辞書類・漢字学習書・書体の分かる書が多数を占めており、形態面では大多数は線装本であったが、甲骨片・拓本・抄本・洋装本などもあった。当然のことながら、さまざまな漢字や書体を展示していたので、“文字”をたくさん見ることになる。

図録から企画展の展示品を分析した結果、以上のような特徴・傾向が読みとれた。

(3) 見学テーマの設定と見学史料の選定

第1節に述べたように、前回の反省を踏まえ、今回の学外研修では「気づき」や「知的好奇心」の発生を促すために、視点や思考をリードする、つまり一定のテーマや枠組みを与える必要を感じていたので、「漢字展―4000年の旅」の企画展図録を検討した上で、見学テーマについては次のように定めた。

企画展では、漢字の書体、書写材料が時系列で揃っているので、通史的に漢字の書体、書写材料、書籍の形態の変遷が理解できるようなテーマがないかと考えた。さらに、前回の学外研修で絵やイラストのある史料は、学生の興味をひきやすく、知的好奇心をかきたてやすい点を踏まえ、企画展の展示品には多くなかった挿図のある書籍やポスター（近代）を書庫で見学することにより、上述のテーマを補い、学生の関心度の維持を狙うことにした(14)。

その結果、漢字は何よりも意味や事柄を伝えるためのものであり、近代のポスター同様に、時代時代によってある歴史的な背景をもって登場している“メディア”であるから、「中国の“メディア”の歴史を考える」というテーマのもとに、見学史料の選定を行い、史料の紹介・説明をし、個々の史料についての設問を用意することとした(15)。

その設問については、第1節で述べた前回の学外研修の結果を鑑み、注意・注目すべき点を示したり、具体的な問題を設定し、学生の「気づき」や「観察力」、さらにはそれをもとに「考える」ことを促すものになるよう工夫した。

(4)「中国の“メディア”の歴史を考える」の概要

このようにして決まった「中国の“メディア”の歴史を考える」というテーマのもと、学生の理解をサポートするために、また工夫した設問をもとに、より深く史料を観察・見学してもらうため、特別小冊子を作成し、学生に学外研修当日に配布し、移動するバスのなかでの一読を求めた(16)。

特別小冊子では、まず“メディア”とは、情報や記憶を記録・伝達する“モノ”のことで、現代のマスメディアやインターネット、SNSも含むことを提示し、中国のメディアの変遷を紹介した。

以下に、特別小冊子の章のタイトルを掲げ、章ごとに概要を記しておく。

0. メディア・書体・利用者の三角関係

メディア（甲骨・青銅器・紙・線装本）と書体（甲骨文字・金文・行書・楷書）と利用者（王・貴族・科挙受験者）の相互関係を解説（殷代～唐代）。

1. 写本、ハンパないって !!

唐代以降のメディアには、写本があり、時に注釈が加えられた。古典籍が中国から日本へ、また現代に伝わり、意味も理解できるのは、無数の人びとが“書き写し（コピー）”た写本（記録し伝えるためのメディア）の存在があったからなのだ。（唐代～）

2. 木版印刷がやってきた

唐末に木版印刷技術が確立し、仏教の普及とともに多くの仏教経典（お経）の需要がたかまった宋代では、労力が必要な“書き写し”ではなく、大量生産に適した木版印刷で生産（コピー）された。木版印刷されたお経の“折本”という形態は、読みあげるためのメディアなのだ。（宋代）

3. エンターテインメントですのっ

木版印刷はやがて“線装本”という形態が主流になり、読みあげるためのメディアは、宋代の講談師や清代の演劇の台本のように、庶民たちの“エンターテインメント”に使われるために作られ続けた。（元代～清代）

4. 1家に1冊“にちようるいしょ”

明代になり庶民も書籍を買うようになると、庶民向けの“日用類書”と呼ばれる挿図があり、社会生活に密着した事柄が豊富な書籍が流行した。“書籍”というメディアが庶民の手に渡ると読んだり見たりするものへと変化した。（明代）

5. “線装本”のカタチとオオキサ

書籍の主流な形態である“線装本”も、大きさ・サイズが異なれば、使用目的が違う。使用する目的や場面によって、メディアの大きさは変わるのだ。（明代～清代）

6. ポスターの登場

“はやく・ひろく・おおく”の人びとに物事を知らせるために、それまでの“石”にかわって近代になって“ポスター”というメディアが登場した。イラストや絵画を使って多くの人びとに“見せるためのメディア”であるポスターは、近代国家において民衆の考え・思想をも動かしてしまう危険性が存在していた。

以上のように特別小冊子では、“メディア”というキーワードを軸に、中国の歴史・社会が時系列で概観できるように作製した。時系列順にしたのは、学生のテーマに対する理解を容易にさせるためである。

また、特別小冊子の解説と設問では、あるテーマにしたがって、史料を細かく丁寧に「観察」すれば、「気づき」に繋がること、形態の違いには意味があるので、

そこに「注意」すれば、何かを「読みとる」「考える」ことに繋がる、そんな経験を学生にしてもらいたいという狙いもこめた。

次章では、テーマの理解や狙い通りの反応が学生にあったかどうか、さらには教育的効果はどのようなものだったのかについて、設問と学生の解答を分析して検証してみたい。

3. 学生の解答の分析とその評価

これ以降は、特別小冊子の設問に答える形式であるため、見学を指定した史料を章ごとに概説する。また、設問は、それぞれの史料ごとに1問から数問用意してあり、同じ頁ないし同じ見開きの史料の解説文を見ながら、解く形式に作製した。ここでは章の最後に設問をまとめて挙げ、設問に対する学生の解答ならびにその分析を行うこととする。

(1) 東洋文庫ミュージアム展示品についての設問と学生の回答の分析

第0章　メディア・書体・利用者の三角関係

◎甲骨卜辞片〔5〕(末尾の亀甲括弧内の数字は、図録での番号を示す。以下、同じ)

殷王と家臣が占いの内容と王の判断をみるための少人数向けメディアであり、亀甲獣骨に刻まれた甲骨文字が使われている。字体としては、骨に刻んだものなので、“直線的”であること、また画数の少ないものが多いなどの特徴がある。

◎千字文〔10〕

展示品は本来漢字学習のための書籍だが、金文（篆字）が大きく書かれ、その下に小さく楷書が示されている。さらに“拓本”であることから、“金文の字形を知るために使われた”と説明した。その字体は、青銅器に鋳こまれたものなので、線の太さが均一で丸みを帯びている。

◎蘭亭序〔9〕

有名な書家の王羲之（東晋）が書いたものの“コピー”で、この時代は筆と紙を使って漢字が書かれるようになった、と書写に使われた道具の変化に触れた。

その上で、幅1cm前後の簡牘（木簡・竹簡）から平面の広さを持つ紙に変わったことにより、より自由な書体（行書・草書）が誕生したと解説し、書写材料の変化によって書体も変化することを示した。

さらに、千字文と蘭亭序は、石に刻まれていたものを紙に写し取った“拓本”と呼ばれるものであることに触れておき、メディアの媒体が違えば、その使用対象や使用目的が違うことを設問に含ませた。

◎急就篇〔7〕

前漢時代にできた識字用の書で、展示品は明代に楷書で印刷された“線装本”と呼ばれる書籍の形態である。また、史游が書いた本文「急就奇觚與衆異」(7文字)

に対して、時代の異なる3人が長い注釈（4行以上）をつけている意味については、「本文が後の人々にとっていかに分からない漢字・ことばだったかを示している」と記した。

この節では、メディア媒体の違いは、利用者の違いに由来することを通して、史料の形態は、使用目的によって規定されるという関係性に気づいてもらうことを目的としている。簡牘・青銅器の実物は東洋文庫は所蔵していないので、見学史料には含められなかったが、とくに“拓本”は他の史料と形態が明確に異なるので、それには理由があること（史料の形態には、意味があること）は多くの学生が理解できることを期待した。

以下、設問ごとに学生の回答とその分析を述べる。

Q.1“王”の字を含む甲骨文字をみつけ1行分“コピー（うつす）”しよう。

回答率87.1%（無回答者4名）

2名が“特に興味を持ったもの”に挙げ、3名が“気になったもの数点”に甲骨卜辞片をあげ、次のようにコメントしている[17]。

「以前の授業でやったように、すごい難しい文だった。“王”という字は古くから「王」という字で変わらないということが見て分かった。」「よく甲骨に文字を彫ったなと思った。どのようにして彫ったのか気になった。占いの結果として残していたのが興味深いです。一番古い形であるのにけっこう読めた（文字が理解できた）ことに驚きました。」

甲骨文字の“王”字が楷書の“王”字とほとんど変わらないことを通して、他の甲骨文字も書き写すことにより、未知のものを知るきっかけや好奇心を持った学生がおり、その文字の彫り方・書き方にまで関心が及んでいることが分かる。

実際に展示された甲骨文字を書き写させたことにより、学生にとって身近なものとなり、書き写す過程でじっくりと「観察」させたことにより、強い印象を残し、文字の実際の彫り方・書き方にまで興味が及んでいる。このことから、難しいもの、未知のものでも、「作業」を通じた細かな「観察」により、教育的効果が望めることが分かる。

Q.2 亀の腹甲とウシやシカの肩甲骨が占いに選ばれた理由を考えてみよう。

回答率83.9%（無回答者5名）

甲骨文字が刻まれる対象は、なぜ特定のものなのか、その理由を考える問題である。これはいくつかの学説があり、定説はないが、学外研修の目的が「観察」や「注意」にもとづいた「気づき」や「読みとり」であるので、質問としてみた[18]。

代表的な答えは以下の通り。

「加熱するとヒビが入りやすいから」など、占いの過程での割れやすさを挙げ、

文字については触れないもの（12 名：46.1%）。

「亀 : 長寿なので、未来予知能力が期待されていた。牛など : カメの甲羅の確保に困ったから」「占いだけに、カメ・ウシ・シカには呪術的意味が込められていたからか」など占いと動物に関連性を想定したもの（5 名：19.2%）。

形態と関連づけてコメントしたのは 1 名にとどまった。

「平らで比較的大きな骨なので使いやすかったのではないかと思った」（1 名：3.8%）。

この結果は、正解へ導く着眼点やヒント（どちらも平面で比較的大きい、文字が彫りやすいのはどんな骨だろう、など）がなかったために、特別小冊子や展示解説のひび割れで占う、結果を刻むといった情報をもとに解答したためだと思われる。「占いに使ったから」などという答えになっていないもの（3 名：11.5%）が複数見られたのも、正解らしい解答を見いだせなかったからであろう。この点、設問に正解へのヒントとなるような「導き」を提示すべきだったかもしれない。

Q.3 甲骨文字と金文の字形を比べて、それぞれの特徴を複数挙げてみよう。

回答率 94.5%（無回答者 2 名）

「甲骨文字：線の組み合わせのような簡単な形の字がほとんど。金文の字は曲線を使ったものか画数が多い複雑なものが多い」「甲骨：直線で構成、基本的に簡単な作り。金文：曲線が多い。文字自体が複雑」「甲骨文字はナイフで削ったように角張った直線ばかりで構成されているが、金文は甲骨文字よりも複雑で曲線が多い」など、両者の特徴を回答したもの（17 名：58.6%）。

「金文はきれいに整列していて縦に線が入っている」「金文の方がはっきりしている」「一文字が大きい」など、片方（金文）だけの特徴を回答したもの（7 名：24.1%）。

「金文は甲骨に比べ丸い」など、ほぼ説明のうけうりだったもの（5 名：17.2%）。

前と後ろの展示ブースに比較する対象があり、特別小冊子で金文の特徴を「線の太さが均一で曲線的」だと触れていたこともあって回答率は高かったが、説明のうけうりに近い回答も複数あった。

「それぞれの特徴を」挙げる問題であったが、金文の特徴しか答えていないものもあったが、よく観察した結果の回答が少なくなかった。特徴が印象的なものか具体的なものかの差はあったものの、8 割以上の学生は「観察」した結果を回答したと思われる。

Q.4 拓本を書物にしたものは、どのような人が見たり使ったりしたのだろう。

回答率 96.8%（無回答者 1 名）

複数挙げた回答も個別に数えた場合、以下のような回答であった。

貴族（18 名：60.0%）、名士（5 名：16.7%）、官僚（3 名：10.0%）、科挙を受ける人（2 名：6.7%）、知識人（2 名：6.7%）、商人（1 名：3.3%）その他（5 名：16.7%）。

実は特別小冊子では、これら回答にあげられたことばはどこにも出ていない。この設問の直前で“展示品の「蘭亭序」『千字文』はともに、石に刻まれたものを拓本にとり、それを書物にしたものだ。”ともともと石に刻まれていたものを、書物にしたものが拓本だという説明をしてあるだけである。

「持ち運ぶ、移動の多い人」「多くの人が字に触れることができるようにするため」「庶民が見られるようにするため」という回答や「商人」という回答は、正解ではないものの、その説明を踏まえて考えたものだといえるだろう。

上位を占める「貴族」「名士」はミュージアムの展示パネルの解説にあった言葉で、多くの学生はそれを答えに選んだようだ[19]。ただし、そこには“拓本”の形にする必要性はない。誰かの字が刻まれた石碑を拓本にしてまで身近に置く必要のあった人、すなわち習字をする人、字を鑑賞する人というこころにまで考えて回答した学生は以下の 3 名であった。

「王羲之は“書聖”と言われているから、習字のお手本ではないだろうか」「官僚や知識人などの美しい字を書く必要がある人」「貴族たちが使ったり見てたりしていた」（3 名：10.0%）。

設問に対して、学生たちは特別小冊子、ミュージアムの展示パネルのなかから答えや答えのヒントを得ていたが、そこに答えらしいものがあるとそれ以上の考えをやめてしまう傾向が見て取れる。拓本は、ある場所にたてられた石碑の文字を正確にうつしとったもので、石碑の場所に行かずしてその文字を見ることができた、など、より踏み込んでヒントを提示するとより良い設問になっただろう。

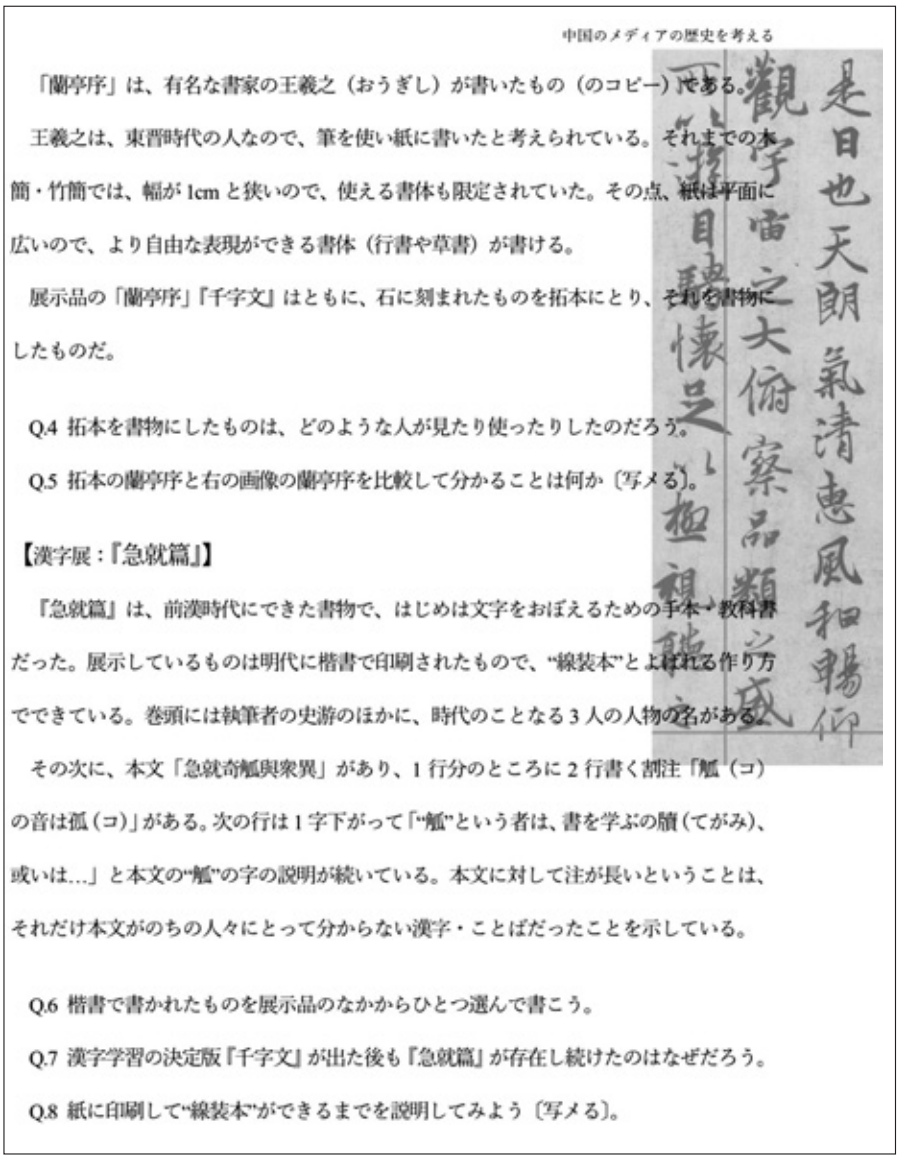
Q.5 拓本の蘭亭序と右の画像の蘭亭序を比較して分かることは何か〔写メる〕。

回答率 90.3%（無回答者 3 名）

拓本の蘭亭序は展示されていたもので、画像の蘭亭序は、**史料 1** に掲げたように特別小冊子に掲示したもの（オリジナルを摸倣した、“摹本”と呼ばれるもの）である。

特別小冊子の方では、画像に線を加え、縦の行が下にいくほど左に寄っていること、下端は揃っていないことなどを示している。他方、展示品の拓本は、書を鑑賞・学習するためのものであるので、文字と文字の間が調整され、画像にみられる流れるような運筆に欠けるものの、字の細部まで表現されている。

特別小冊子で、展示品のものが“拓本”と呼ばれるものだということは説明してあるが、学生の回答を見ると、字の部分が拓本は白く画像は黒いという、パッ



中国のメディアの歴史を考える

「蘭亭序」は、有名な書家の王羲之（おうぎし）が書いたもの（のコピー）である。

王羲之は、東晋時代の人なので、筆を使い紙に書いたと考えられている。それまでの本簡・竹簡では、幅が 1cm と狭いので、使える書体も限定されていた。その点、紙は平面に広いので、より自由な表現ができる書体（行書や草書）が書ける。

展示品の「蘭亭序」『千字文』はともに、石に刻まれたものを拓本にとり、それを書物にしたものだ。

Q.4 拓本を書物にしたものは、どのような人が見たり使ったりしたのだろう。

Q.5 拓本の蘭亭序と右の画像の蘭亭序を比較して分かることは何か〔写メる〕。

【漢字展：『急就篇』】

『急就篇』は、前漢時代にできた書物で、はじめは文字をおぼえるための手本・教科書だった。展示しているものは明代に楷書で印刷されたもので、“線装本”とよばれる作り方でできている。巻頭には執筆者の史游のほかに、時代のことなる 3 人の人物の名がある。

その次に、本文「急就奇觚與衆異」があり、1 行分のところに 2 行書く割注「觚（コ）の音は孤（コ）」がある。次の行は 1 字下がって「“觚”という者は、書を学ぶの牘（てがみ）、或いは…」と本文の“觚”の字の説明が続いている。本文に対して注が長いということは、それだけ本文がのちの人々にとって分からない漢字・ことばだったことを示している。

Q.6 楷書で書かれたものを展示品のなかからひとつ選んで書こう。

Q.7 漢字学習の決定版『千字文』が出た後も『急就篇』が存在し続けたのはなぜだろう。

Q.8 紙に印刷して“線装本”ができるまでを説明してみよう〔写メる〕。

史料 1　特別小冊子（5 頁）

と見た違いを答えたものが多数を占める結果となった。

「原本は文字が白く周りが黒い」「墨に石をぬり、紙に写したため、黒い」「背景と字の色が逆だった」など拓本と摹本の違いを答えたもの（7 名：25.0%）。

「拓本には罫線が引かれている。一番下の文字がそろえられている」「文字のくっつきの具合など微妙に異なっている」「拓本の蘭亭序の方が読みやすく、字体もちがう」「画像は、筆のとめはねはらいが、じゃっかん荒い」など、微妙な差を

観察し正しく答えた回答（21 名：75.0%）。

パッと見て拓本とそうじゃないものだと細かな観察にまで達しなかった 4 人に 1 人の回答もそれ自体を一概に誤答とはできないが、やはり事例を出して細かく比較することを促すような設問にしなければならない。ただし、この設問に限っていえば、Q.5 でも見られたように、学生が拓本についての知識がなかったために、より深い観察までに至らなかったと考えられる。

また学生は、設問を注意深く読んで回答する場合もあるが、印象からパッと答える場合もあり、時間がないと後者の回答パターンに飛びついてしまったとも推測できる。今後はこうした学生の回答パターンに留意し、学生が問題を十分に理解できる設問を作るべきであり、事前学習で予備知識を教えることが望ましいだろう。

Q.6 楷書で書かれたものを展示品のなかからひとつ選んで書こう。

回答率 90.3%（無回答者 3 名）

複数挙げた回答も個別に数えた場合、以下のような回答であった。

急就篇（14 名：50.0%）、蘭亭序（5 名：17.9%）、永楽大典（2 名：7.1%）、殿試策（2 名:7.1%）、文選（1 名:3.6%）、史記（1 名:3.6%）、千字文（1 名:3.6%）。

この章では字体の変遷を時系列で紹介しているので、ここで楷書で書かれたものを選ばせた。特別小冊子には急就篇が「展示しているものは明代に楷書で印刷されたもの」と説明しておいた。

したがって、答えのうち明らかに間違っているのは、蘭亭序（展示パネルで“行書”と明記）、千字文（金文）で、これらを回答した学生は 6 名（21.5%）を占めた。また無回答者も 3 名（9.7%）いたことを考慮すれば、正答率は 7 割ほどになる。

史料 1 にあるように急就篇は楷書だという説明の後の設問で、展示品のなかから楷書のものを選ばせるものであったので、急就篇という回答は特に何も考えずに答えた可能性が高い[20]。したがって出題側としては“急就篇の他に”という言葉を設問に付け加えるべきであった。

Q.7 漢字学習の決定版『千字文』が出た後も『急就篇』が存在し続けたのはなぜだろう。

回答率 90.3%（無回答者 3 名）。

漢字学習の決定版が千字文に取って代わられた後でも急就篇が存在したのは、歴代の注釈者が多くの注をつけていることから分かるように、急就篇の漢字や言葉が後代では注釈なしでは理解できないほど難しいものになっていたから、というのが想定した正答であった。

「時代によって新しい言葉や失われた言葉があるから」「千字文は急就篇よりも

簡単で文字も少ないので、科挙を受けたりするには不足していたから」など、正答もしくは正答に近いもの（6 名：21.4%）。

以下は誤答となる。

「韻を踏んでいる」「いろは歌のように」「覚えやすかったから」など千字文の展示パネルのことばを使って千字文の特徴を答えたもの（11 名：39.3%）。

「千字文はどちらかというと難しく専門的で、急就篇は教科書のようでわかりやすい」「漢字学習のスタンダードになっており、覚えやすいから」など千字文と急就篇の特徴を勘違いしている回答（9 名：32.1%）。

実に 7 割の学生が誤答してしまった理由は、特別小冊子の解説が分かりにくかったのか、“ 分からない漢字・ことば ” が載っている急就篇が存在し続けたこと自体に理解が及ばなかったからか、学生にとっては難しかったようである。

本文と、それに対する注釈と、その注釈に対する注釈（疏）といった、中国伝統の注釈のつけ方を事前に教えておけば、あるいは正答に近いものが出たかもしれない。

Q.8 紙に印刷して “ 線装本 ” ができるまでを説明してみよう〔写メる〕。

回答率 51.6%（無回答者 15 名）

「一枚の大きな紙の片面に印刷し、二つに折り込み、ひもで綴じる」など印刷→二つ折り→ひもで綴じるという過程も書いた回答（5 名：29.4%）。

「片面に書き、折ってひもで結んでいる」など、片面に “ 書く ” とあるがそれ以外はおおむね正しい回答（7 名：41.2%）。

わからない（3 名：17.6%）。

このほかには、「線装本ってなんですか」とコメントした学生がおり（1 名：5.9%）、特別小冊子では、“ 展示しているものは明代に楷書で印刷されたもので、“ 線装本 ” とよばれる作り方でできている。” とのみ説明しているので、このわずかな説明をもとに、目の前の史料を観察することで “ 制作過程を考えさせる ” やや高度な問題であった。無回答者が学生の約半数だったことがこれを裏付けている。

ただし、回答した 3 割の学生は正答を導き出し、4 割の学生も “ 印刷 ” ということばを使っていないものの、紙の片方の面に文字があり、それを山折りにしたものをひもで綴じる、という製造過程は考えついている。

このように、回答のためのヒントや説明が極端に少ない場合、学生は設問を読んだ段階で回答をあきらめる場合（19 名：61.3%）とそれでも考えて設問に回答する場合（12 名：38.7%）とに大きく分かれることが見て取れる。

学外研修でも講義・座学でも同様だが、さまざまな考えや学力の学生がいるので、設問も学生すべてが分かるようにするか、あきらめてしまわないように何ら

かのサポートやヒントを出して設問を解こうとするよう工夫が必要となる。

第 0 章の設問は、問題解決の点で以下のように大別できる。それぞれの正答率をあわせ、改めて全体的な分析を加えてみたい（〈〉は設問の正答ではないものの、解答するために正しく観察・思考をしたと思われる答えを含んだ割合）。

Q.1・Q.3：展示品を実際に見る（97.1%・82.7%）

Q.5・Q.6：展示品とほかのものを比較検討する（75.0%・78.5%）

Q.2・Q.7：特別小冊子の解説を理解する（3.8〈68.3〉%・86.7%）

Q.4・Q.8：展示品の観察と想像力（10.0〈76.7%〉・29.4%〈70.6%〉）

無回答を誤答に含めていないために、全般的に高い数字が出たが、一つの史料の観察だけが必要なものから、その観察をもとに想像したり、他の展示品と比較したりと、下にいくほど複雑で難易度が高い作業となる。

上に示された数字は、今後の学外研修における学生の作業を考える上で一定の参考となるだろう。

第 1 章　写本、ハンパないって !!（3c~10c/ 三国 ~ 唐）

この章では、コピー機や印刷機がなかった時代に、手書きによる途方もない労力を使って人びとがメディア（写本）を共有し、伝達していったことに焦点をあてた。

◎国宝　史記秦本紀〔20〕

◎重要文化財　論語集解〔21〕

ふたつの写本は、中国の書物でありながら、“ 書き写す ” という行為により国境も時間も越えて伝えられている。また、『論語』は魏の時代に、『史記』は南朝宋の時代に、原文のままでは意味を理解しにくくなったために、注釈をつけて書き写され、約 2000 年後の私たちが原文の意味を理解できるのは、注釈あってのことである[(21)]。

さらに詳細な観察を促すために、『論語集解』には一定の幅で折りたたまれた跡がある “ 折本 ” であり、『史記正義』はクルクルと巻かれた跡が見られるので “ 巻子本 ” の形態であることを説明した。

同じように見える史料でも細かく見れば違う点、「気づく」こと、「発見」があることを示すことで、注意深く観察することの大切さを学生に示した。

以下、設問ごとに学生の回答とその分析を掲げる。

Q.9 書き間違えをしない、あるいは、書き写すために工夫されている点はどこか。

展示品を観察することも必要だが、まっさらで何も書かれていない紙を想像し、そこから展示品のようなものを作る（書く）には、という “ 想像 ”“ 設定 ” ができ

れば、正答は得られる。

「罫線があって、行分けされている」「秦本紀にはマス目のようなものがあった」「縦線がひかれている」など“行”を作るための縦線（“マス目”はないが、天地にそれぞれひかれた線を指しているのか）の存在を指摘した回答が正答（3名：12.0%）。

「ヲコト点を打ち、カタカナも慎重に書いていた」「拓本と印章の技術ができ、ヲコト点の打ち方」など“ヲコト点”などを指摘した回答（14名：56.0%）。

「メモ書きをしていた」「書き写す人に罰金を与える」などその他（5名：20.0%）。

結果は、無回答が約2割（6人:19.4%）で、「分からない」（1名:4.0%）もあった。展示パネルの解説文にあったヲコト点を答えとした学生が多かったことを考えると、観察しても気づけなかったのであろう。

したがって、“原稿用紙”をヒントに出すなど「気づき」のためのサポート・手助けが教員・設問に必要であったと考えられる。

Q.10 それぞれの本は、成立してから約何年後に“書き写された”ものか。

この設問は、4人の無回答（12.9%）以外は、すべて正答であった。

成立年と日本での書写年は展示パネルに書いてあり、計算という作業により答えは求められる。

Q.11 実際に展示品を観察して、気がついたことは何か。

自由な気づきを問う設問として用意した。4人の無回答（12.9%）以外は、みな観察に基づいた意見を書いている。いくつかの例を挙げる。

「楷書で書かれている。史記は比較的文字の大きさが統一されている。論語集解は、一行の枠に二行書かれ、大きい字と小さい字がある」「赤い字が使われている」「思ったより書き込みが多い」「たくさんの文字を書くときにどうやって字の間隔を等間隔にしているか気になりました」「メモがあったり返り点があったり、いろいろ工夫してある」「訓読がつけられている」。

工夫に関心していたり、どうやって書いたのか気になるなど、興味関心や知的好奇心が刺激されていることがみてとれる。やはり、答えのある設問ばかりではなく、自由に意見や考えを述べる機会を設けると学生の素直な感想が出てくるのでよいだろう。

Q.12 上下に空白が設けられている。この余白はなぜあるのだろうか。

「注をつけたり、本が周りの部分を破損してもだいじょうぶなようにするため」「巻物が変に丸まったなどのため。メモスペース」など上下部分の破損に言及し

た回答（2 名：7.4%）。

「小さなメモ用紙」「注をつけるため。間違えた時用」「説明を書くため」など余白に書きこむという回答（17 名：63.0%）。

「見やすい。手で押さえたりするため」「より読みやすくするため」など（6 名：22.2%）。

見やすく、読みやすくするも、上下部分がなかった場合を“想像”しての回答であるから、この設問は、本来は破損しても本文が失われないためだが、やがてはそこに書写の際のコメントを書くようにもなったので、これらの答えはすべて「観察」による「気づき」から導き出した正答だと言えよう。

特別小冊子で意識した、詳細な観察からの気づき、また史料について考えるという目的通りの設問となった。

Q.13 巻子本は、書物の“ある箇所”を見るためには少し不便である。それはどこだろうか。

これは以下のような回答が出た。

両端（8 名：30.8%）：「両端を読むときに時間がかかる」「最初と最後」「巻物のようになっているので、両端が見づらい」。

最初か最後のどちらか（6 名：23.1%）：「最初が見にくい。（開くときに最後から始まるから）」「最後や真ん中」「書いてある端。最初か最後」「題名・表紙」など。

上記以外には、このような回答があった。「ところどころにある小さな文章に返り点がついていない」「1 行で 2 列の文がある」など“巻子本”に限らず不便なところを挙げた回答や、「読む際に少しずつ広げないといけないから」「糸でとじているところ」「裏」など、やや不可思議な回答があった。

これは、史記秦本紀〔20〕が**史料 2** のように巻子本の中ほどを開いて展示されており、さらに巻子本が保管されている状態を学生が知らなかったせいであろ

史料 2　史記秦本紀（国宝　東洋文庫所蔵）

※画像は、右の部分と左の部分を真ん中でつなぎあわせることにより、当日の展示の様子の再現を試みた。

う。したがって、回答の“両端”“最初か最後”は、史料を実際にみて回答した結果であり、いわば読書中の状態である。“巻子本”の閉じた状態、保管されている状態の姿を事前学習などで教えるか、特別小冊子で示しておけば、ただしい巻子本の姿、さらには正しいメディアの変遷の理解につながる可能性があったはずなので、その点も設問の配慮に欠けていた。にもかかわらず、学生は史料をありのまま観察し、学生なりに考えて答えている点は今回の学外研修での狙いがまったくはずれてはいないことを示している。

一方で、学生は目前の史料に対し、その史料の状態がひとつの完成形、あるべき姿だと捉えてしまう傾向にあり、保管した状態がどうであったか、読み始めはどうだったか、などは、何らかのサポートがなければ気づくのは難しいことも示している。現物の史料を実見する学外研修では、正しい理解へ導くサポートや工夫が必要であることは留意すべき点であろう。

Q.14『論語集解』と同じ展示フロアにある書籍のなかから、折本を見つけてみよう。

前問で紙やメディアの形態に注目させ、ここでは“折本”（蛇腹折り）を探すというものである。学生の回答は、無回答が6名（19.4%）の他、以下の通りである。

殿試策（14名：56.0%）、道宗宣懿皇后哀冊（6名：24.0%）、万葉集（3名：12.0%）、誤答（後漢書、尚書正義、2名：8.0%）

無回答の割合が多かったものの、正答率は92.0%と、よく観察し、折本がどのようなものかを確実に理解して回答していることが読みとれる。なかでも殿試策は、『論語集解』の背後にある別の展示ブースにあったもので、殿試策に対する注目の高さがうかがえる。ほかにも折本のものは展示されていたが、正面から見ても折本だと気づきやすいものが回答として選択された。

(2) 東洋文庫書庫見学品（ポスター）についての設問と学生の回答の分析

これ以降は、主に東洋文庫の書庫で筆者らが選んだ史料を見学し、設問を解いたものである。ミュージアムの時との違いは、展示パネルの解説がないため、特別小冊子の説明と目の前の史料だけが回答の手がかりになる、という点がミュージアムの展示品の場合と異なる。ここでは、紙幅の関係上、最終章であるポスターについての史料説明と設問を紹介し、学生の回答の分析を行う。

第6章　ポスターの登場

第6章のポスターは、多様な意味合いを持っているもの、共通したイメージがあるものを選んでいる。以下に、史料ごとに内容を簡単に紹介して、設問と学生

の回答、その分析をする。

なお、史料名の後の括弧内に、東洋文庫の請求番号を挙げておいた。

◎建国大綱表解（3-6902-2905）

黒と赤の２色刷りのポスターで、一番上に左から“建国大綱表解”とあり、その中央には孫文の肖像がみえる。内容は表組になっていて「三民主義　五権憲法」を根拠にした「目標」と「程序（順番・過程）」が示されている。

学生には、三民主義や孫文を調べて良いので、ポスターを製作した国家を答えさせ、漢字だらけで目標を掲げているものを誰に見せたのかを考えさせた。

Q.23 この国家の名前を書き〔ググる〕、ポスターを見せる相手はどんな人だろうか。

回答率 90.3%（無回答者３名）。中華民国・官僚（11 名：39.3%）、中華民国・国民（8 名:28.6%）、中華民国･軍閥（2 名:7.1%）、中華民国･日本人（1 名:3.6%）。

国名だけを答えたもの、見せる相手だけ答えたものは以下の通り。

中華民国（3 名：10.7%）、官僚（2 名：7.1%）、国民（1 名：3.6%）。

実際のところ、このポスターがどのように使われていたかは、詳しくは分からないが､漢字･文字を知らなければそれほどの効果は見こめない。そうしたメディアの有効性について思いつけば、“中華民国”の“官僚”に見せたとするのが妥当であろう。漢字が読めて意味が分かる国民を想定しているのであれば、それも間違いではない。

国家の建設過程において、指導者の掲げたスローガンを貼っておいたものだとすると、中華民国が自国の官僚（あるいは国民）に見せたものだといえよう。

とすると、誤答は３名（10.7％：中華民国・軍閥、中華民国・日本人）のみとなろう。

◎執政宣言（3-6902-35）

上半分にはカラーのイラストがあり、色鮮やかに菩薩のような人が空に舞い上がり、地上では男女が旗を振って喜んでいる様子が描かれている。下半分には縦書きで大きく「執政宣言（政治を行う上での宣言）」とあり、中ほどには「今立吾国」とあるので、ある国家が成立してまもないころに、絵を見て“良い政治を行ってくれそう”だと思わせたいポスターになっている。

なお、ポスターの左下には、「大満州国」と書いてあり、学生の回答ではみな「満州国」「大満州国」などと正答であったので、見せる相手・理由についての回答を紹介しよう。

Q.24 この国家の名前を書き、ポスターを見せる相手はどんな人だろうか。その理由とともに書こう。

回答率 90.3%（無回答者 3 名）。救済・いいイメージ・支配はよいもの・プロパガンダなど（8 名：28.6%）、日本支配の正当性について（8 名：28.6%）、国民道徳・国民の心構えについて（3 名：10.7%）。

学生の回答をみると、ポスター全体を見た印象から「救済・いいイメージ・支配はよいもの」としたり、そうした「プロパガンダ」だと考えたようである。日本支配を正統なものだと主張する内容だと答えた学生は、満州国は事実上日本によって建国された傀儡国家だということを知っていたからであろう。

文字がほとんどなく、イラストが主要な内容のポスターは、全体のイメージや印象から受けるメッセージという性格が色濃いと考えられる。このことは、学生の回答にポスターの細部についての感想や指摘がなかったことからも裏づけられよう。ポスターからは満州国がこれから行う政治はすばらしく、みながよろこぶものだ、というイメージが伝わってくる。その後ろに日本の存在を想定するかどうかは、ポスターだけではうかがえない。

◎日本獣兵焚殺東三省之惨状（3-4139-6）

日本軍が中国東北地方で中国人に暴力をふるっている様子が描かれている。日本兵が虎あるいは狼の姿として描かれたのは、日本がこの後にイギリスやアメリカを「鬼畜米英」と呼んでいたことと同様である点を指摘し、下の設問に答えてもらった。

Q.25 このポスターを当時の中国人がみたらどう思うだろうか。理由とあわせて考えよう。

日本軍は“野蛮”“残酷”だと思うなど（12 名：41.4%）、中国人として対抗しなければいけないという反発心など（6 名：20.7%）、こんなことをする人びとは嫌い・悪印象になるなど（5 名：17.2%）、狼藉ぶりに怒るなど（3 名：10.3%）、「日本人が中国を武力で侵略、制圧しようとしている」など時代の流れや事実を指摘するような回答（3 名：10.3%）。

同じポスターをみても、事実を指摘するにとどまる場合や、中国人が奮起して対抗心・敵愾心がわくという答えもあり、ただ野蛮で残酷だというイメージだけではないことは、学生のとらえ方もまた多様なものであることを示しているだろう。野蛮・残酷・悪印象という回答がほとんどを占めると予想していたが、思いの外、そうではなかった。

あるいは、執政宣言（3-6902-35）のような好印象を与えようとするポスターよりも、現代のネガティブキャンペーンのようなものに接する機会の多いであろ

う学生たちは、より慎重に観察したり考えたりして、回答をした可能性も指摘できるかもしれない。

◎抗日救国（3-4139-2/3-4139-3）

「上海美専学生抗日救国会（上海美術専門学校抗日救国会）」が制作した、写実的で動きを感じさせる絵・構図のポスターであり、中国人ひとりひとりの顔の表情を描きわけ、時におかしくなるようなポーズや構図を取り入れている、珍しいポスターである。

当時の中国における“日本人”はどのように描かれたのかを聞くことにより、メディアにおいては国籍や国家はステレオタイプ化されてしまうこと、そのようなものは具体的事実ではないことがあることを暗に示そうと考え、下の設問を用意した。

Q.26 このポスターと「日本獣兵」のポスターの日本人には、いくつかの点が共通している。それはどんな点だろうか。

回答は、以下の3点に大別できた。

「色黒･下駄、日本人の顔のほうが細かくかかれている。毛深い」「下駄を履き、青ヒゲでやや肌が黒い」などの具体的な外見（13名：43.3%）、「中国人を一方的に迫害しようとしている」「中国人をこらしめている」「中国人を痛めつけている」などの行動（9名:30.0%）、「日本人が強く描かれている」「悪くかかれている」「悪人として書かれている」などの印象（9名：30.0%）。

共通点を挙げる問題なので、外見を観察するか、行動を観察するか、全体的な印象・イメージを見て取るか、など回答するための過程が異なり、上記のようにほぼ同数の答えが出てきたと考えられる。

このポスターの場合も、学生がただ一面的なイメージを持つのではなく、個々の学生でいくつかの回答パターンに分かれたことが指摘できよう。このことは、SNSの発信の場において、自身の発信が意図せぬとらえ方をされかねないことと通底しているのかもしれない。

以上、第6章ではさまざまなポスターをみて、「観察」「読みとり」などを学生に促した。その結果、同じ史料をみたとしても、観察の過程、見る側面は必ずしも同一ではなく、何種類かに分かれ、また同じポスターから受けるイメージも多様である傾向が見て取れた。

その一方で、文字が多いものについては、大筋では正答できているものが多く、絵画･画像･ポスターなどを見学対象にする場合、あえてなにがしかのストーリーの中で設問するよりも、より自由な観察力や気づきを養えるような工夫が必要で

あると感じた。

4. おわりに――無回答についての分析をかねて――

以上、特別小冊子の設問とその学生の回答を分析することで、東洋文庫のミュージアムならびに書庫での学外研修の概要、教育的効果について述べた。教育的効果については、いくつかの箇所で述べたように、いかに学生の史料への「観察」や「気づき」を教員側が促すことができるかという点が重要であった。

特に、史料の注目箇所、考える問題においての必要な知識や参考になるヒントの提示など、設問をさらに工夫すれば、より教育的効果が望める場面が少なくなかった。今回の学外研修では、そうした点において反省すべきところも少なくなかった。

おわりにかえて、無回答の多い事例を紹介することによって、設問の工夫が教育的効果を生むことを強調しておきたい。

学生個人で無回答が多かったのは、3年生1名と2年生3名で、無回答の数はそれぞれ20、14、14、11と全体の上位を占めている。このうち3年生の学生は、普段の授業においても落ち着きがなく、じっくりと課題に取り組めない傾向が見受けられるが、以下に掲げる全体コメントを見れば、設問に対してしっかりと考えており、難しさと同時に面白さも感じていることが分かる。

「特別小冊子の質問は、普段からあまり気にならないようなところが問題になっていて、これが意外にもかなり難しいけど、面白かった。」

したがって、考えたけれども考えがまとまらず、解答に至らなかった、と理解してよいだろう。

2年生3名についてはどうであろうか。彼らの学外研修に対する全体評価は、まあまあが1名、とてもよかったが2名で、むしろ高評価をしている。では、無回答が多いということは、興味関心がそもそもないのか、設問が難しくてやる気をそがれたのか、何を示しているのだろうか。以下に総合コメントを挙げ、その点について検討を加えよう。

「普段は見られないものが見られて面白かった。改めて、書庫ってカッコイイと思った。問題が難しくて全然答えられなかった。スマホでググる時間もなく、展示を見たら終わってました。家に帰ったら改めて調べようと思いました。考えさせる問題が多く、うなってました。」

「漢字の古い史料は興味深かった。特別小冊子は難しい問題も多かった。古い時代を感じることができ、とても有意義だったと思う。」

「少し問題が難しいように見えました。パンフレットの頁数が多かったけど、結構分かりやすかったです。」

このように、3名とも“問題が難し”（下線部）いとしながらも、“特別小冊子

は分かりやすかった”“とても有意義だった”“帰宅後に調べようと思った。考えさせる問題が多く、うなった”（波線部）と興味関心や勉学への意欲がそがれたわけではないことが分かる。

彼らが2年生であることを考慮すれば、やはり設問に答える時間や知識に乏しく、3~4年生よりも設問が難しく感じられたのだと判断できよう。したがって、複数学年にわたって学外学修を行う場合、当然ながら低学年の学生には何らかのフォローが必要である。

今回の学外研修でいえば、(i) 設問が難しかったこと、(ii) 答えるためのヒントの提示が乏しかったこと、(iii) 時間が十分にはなかったこと（二重下線部）などへの対応が求められる。

ただし、これらに対して、(i') 問題の難易度を下げる対応では、簡単に気づいたり解答に到達するので、「気づき」による教育的効果はそれほど望めない。(iii') 十分な時間を設定するという対応でも、時間をかけさえすれば気づいたり解答に到達できる訳ではないので、適当ではあるまい。改善するのであれば、(ii') 答えるため、考えるためのヒントの的確な提示であろう。

以上のことは、他の学生全般にも同じようにあてはまっていた。みな時間が足りない、問題が難しすぎる、と言いながらも設問に取り組み、興味や関心を抱きながら、目前の史料に向かって何かを見つけてみようという意欲を高めていた。

今回、特別冊子を用いたことで教育的効果の向上が確認できたが、今後さらに「ヒント」の工夫について検討を重ね、学外研修でその効果を検証していきたいと考えている。

註

(1) 小川快之・中村威也・相原佳之「東洋文庫等での東洋史学コースの学外研修の教育的効果について」（『国士舘人文学』9、2019年）。以下、本稿では“前稿”と称する。

(2) 前稿、82頁。

(3) 前稿、97頁。

(4) 前稿、92頁。

(5) 前稿、87、99頁。

(6) 前稿、99頁。

(7) 企画展の図録である『時空をこえる本の旅22　漢字展―4000年の旅』（東洋文庫、2019年。以下“図録”と称する）は展示品31点に関する解説や漢字に関するコラムなどの記事を掲載している。展示品説明は、実際の展示数（49点）よりも少なく、また解説文も実際の展示パネルと異なる点はあるが、企画展の概要や意図は把握できた。

(8) 図録、1 頁「ごあいさつ」より引用。

(9) 図録によれば、以下の 6 つ。「世界の文字からみる「漢字」」「漢字の成り立ちと発展」「漢字の伝播」「日本における漢字文化」「幕末明治に日本で作られた和製漢語」「知っているようで知らない、漢字にまつわる雑学」。

(10) 展示順は学外研修の当日も確認した。また、「東洋文庫ミュージアム『漢字展―4000 年の旅』展示品リスト」（http://www.toyo-bunko.or.jp/museum/kanji-list.pdf 2020 年 10 月 15 日最終閲覧）でも、他の展示室の展示品も含めて、展示順が確認できる。

(11) 図録では、「急就篇　史游（伝）　紀元前 3 世紀頃成立　刊行年不明　4 巻」とある（8 頁）が、図録の画像でも、書名の“新刻急就篇”や関わった人たち（顔師古注、王応麟音釈、胡文煥校正）などが読みとれるように、明の胡文煥『格致叢書』に収録された『新刻急就篇』か、それ以降の版本であるから 16 世紀以降のもの、明版か清版であろう。

(12) 千文字として展示されたものは、釈夢英が篆書体で書写した“篆書千字文碑”（10 世紀）の拓本に属するものであることは明白で、大ぶりで丸みを帯びた篆書が特徴である。しかし、展示品解説にも図録（11 頁）にもその点についてまったく触れられていない。したがって、『千字文』を見たり聞いたりしたことがない人に、篆書で書いてある『千字文』が“漢字学習の決定版”であり、日本にも 8 世紀には伝来し、漢字学習に使われた、と間違った知識を与えかねないと言えよう。

(13) 書体の変遷が展示順であるならば、『千字文』の位置は明らかにおかしい。漢字学習・習得、科挙のための楷書や異体字という視点からの展示順であるならば、『千字文』は通常の『千字文』（楷書）を展示すべきであろう。科挙の採点上、正字とそれ以外を区別する必要性を解説していたので、唐代に成立した正字・通字・俗字の別を明らかにした『干禄字書』を先に提示・解説した後で、科挙の答案である殿試策を展示する方が来館者も理解しやすいだろう。

(14) 筆者ら 3 人の共同研究の場である「漢籍教材研究会」の初歩的な史料調査で、東洋文庫には中華民国時期のポスターがあることを知っていたので、見学史料に加えた。これも事前準備の一環といえるだろう。学外研修においては何をどのように見せるかは、教育的効果にも直結する重要な事柄であろう。

(15)「漢字展―4000 年の旅」の展示品に加え、「学生が知っているもの」「社会生活に関係があるもの」「挿図のあるもの」「ポスター」を東洋文庫の蔵書のなかから選出し、書庫での見学史料とした。選出した史料は後掲註（16）の特別小冊子を参照されたい。

(16) 2019 年度国士舘大学東洋史学コース学外研修　特別小冊子『中国の“メディア”の歴史を考える』2019 年 6 月 12 日発行。中村威也執筆、全 12 頁。以下、特別小冊子と称する。この特別小冊子は、https://researchmap.jp/wei1ye3/資料公開 にて pdf 版を公開しているので、参照していただきたい。

(17) なお、2 名が“特に興味を持ったもの”と“気になったもの数点”の両方に甲骨卜辞片を挙げ、1 名が“気になったもの数点”に挙げている。したがって人数としては 3 名

で全体の約 10% だったわけだが、ミュージアムの展示ではガラスケースの中の木箱に散らばって置かれていただけだったが、実際に展示された甲骨文字を書き写させたことにより、身近で学生に強い印象を残したことが分かる。

(18) なお、筆者中村の考えでは、卜辞を刻むためには平坦な面が広ければ広いほど容易であると考えるので、そのような形態を持つ甲羅や肩胛骨が用いられた、というものである。

(19) 学外研修日当日の東洋ミュージアムにおける、蘭亭序の展示パネル解説文は以下の通り。

“書聖”王羲之（303–361）の作品で最も有名なのが、行書で書かれた本書です。王羲之は役人として赴任した地の名勝「蘭亭」に名士を招き、詩を詠み合う宴を行いました。それをまとめたのちに書いた序文が「蘭亭序」です。本書が誕生するまでは漢代以来の隷書体が主流でしたが、王羲之が当時徐々に貴族たちに好まれつつあった楷書、行書、草書を用いて書を記したことにより、新しい書体が人々の間に広がっていきました。

(20) ただし、このことはきちんと特別小冊子を読んで誤答を避ける回答をしたとも解釈することができる。

(21) 図録では、『史記秦本紀』となっているが、南朝宋の裴駰による注が付されているので、『史記正義』が正しいのではないかと思われる。詳しい調査が必要であろう。

【追記】東洋文庫の書庫見学に関しては、図書部課長の瀧下彩子氏をはじめ、東洋文庫関係者の方々に様々なご協力を賜った。記して感謝申し上げたい。